

## パークレーで教えるということ

松岡秀明

「自分が受け持っている学生と恋愛するのは結構。だけど、学期が終わってからにしない。」初めてGSIとなる大学院生が出席を義務付けられている大学が主催するセミナーで、アドバイザーは参加者にこう注意を促した。GSIとはGraduate Student Instructorの略で、学部生向けの講義を担当する大学院生のことで、TA( Teaching Assistant)とも呼ばれる。私は8月下旬から12月中旬までの秋学期に、非日系ブラジル人の世界救世教の受容についての博士論文を書くとともに、博士論文をどう書くかについてのゼミに出席している。それとともに、社会・文化人類学入門という主に学部1年生向けの講義のGSIとして働いている。このエッセイでは、アメリカの大学でGSIとして学部学生を教えるということについて書いてみたい。

カリフォルニア大学パークレー校に籍を置くようになってはや4年が過ぎた。それに先立ち、私はサンパウロ人文科学研究所に客員研究員として、サンパウロ大学に特別大学院生として在籍するとともに、世界救世教を中心として日系新宗教を非日系ブラジル人がどのように受容しているかを調査した。そんなわけで、サンパウロでGRE(アメリカの大学院を受験するのに必要な試験で英語、数学、分析力の3つの分野がある)やトーフルを受け、アメリカのいくつかの大学の人類学部へ出願した。そして、92年8月からカリフォルニア大学パークレー校の人類学部の社会・文化人類学科に在籍している。93年の秋から1年間アマゾニアの冠水湿原でのフィールド・ワークなどを行なうため休学、今年の春学期はコロンビア大学人類学部の客員研究員としてニューヨークで過ごしたので、この秋学期がパークレーでの6学期めとなる。

さて、GSIだが英語が公用語でない国からの留学している大学院生は、英語の試験に合格しないと応募資格がない。この試験には苦勞した。試験

は、実際に学部学生3人に対して5分間自分の専攻している分野を紹介するような話をして、それに対する質問に答えるセクションがある。複数の採点者がこのビデオを見て、発音、文法、質問をどれだけ正確に理解し答えているかを判定する。私は1回めではこの試験に合格せず、この試験向けのコースをとって2回めで辛うじて合格することができた。

自然人類学、考古学、社会・文化人類学、医療人類学の四つの専攻からなる人類学部はGSIを希望する院生が多いので、他学部からは採用しないし、人類学部の院生でも出願しても採用されとは限らない。授業料の割引、大学側が健康保険を負担してくれるといった特典があるし、給与が月々支給される。大学側が雇用する学生としては、この他に教授の研究のアシスタントのGSR(Graduate Student Researcher)、試験の採点を受け持つリーダーがある。これらの学生は給与の面で差はあるが、いずれも上のような特典が受けられる。

私がGSIとなっている社会・文化人類学入門の講義は、火曜日と木曜日の12時30分から2時まで行なわれる。学生は講義だけでなく、週1時間ディスカッション・セクションに出席する義務があるが、これについては後に述べる。登録している学生は600人にも及び、そのほとんどが1年生である。講義は講堂のような大教室で行なわれるが、実際講義に出てくるのは半分くらいだろうか。講義を担当するネルソン・グレーバン教授はエスキモー研究で知られている。妻が日系人ということもあって、知日家でもある。国立民族学博物館で客員研究員を務めた際には、日本の観光について調査を行ない、それにもとづいた論文もある。

学生は、アメリカの黒人の貧民街、中国の農民、日本(Norbeck, *Changing Japan*, 1976)、などさまざまなフィールドについての7冊のケース・ス

タディを読まなければならない。講義は、Rosman and Rubel (ed.) *The Tapestry of Culture* 5th ed. (1995) をテキストにして行なわれるが、エスノグラフィック・フィルムと呼ばれるフィールド・ワークに基づいた映画あり、ゲスト・スピーカーの講演ありと盛りだくさん内容となっている。最近、大学院生2人が作製中のメキシコのサパティスタ民族解放軍についてのフィルムが上映されたが、その後には学生から制作者に対して鋭い質問がいくつか出されて、あらためてカリフォルニアとメキシコの近さを感じさせられた。

ディスカッション・セクションとはこの大人数での講義を補うものである。それぞれのセクションは15人が定員となっている。およそ600人の学生に対して GSI は14人いて、それぞれが2つないし4つのセクションを受け持つ。私は GSI になるのが初めてということもあり、自分から申し出て4つではなく2つのセクションを受け持つことにしてもらった。これは、負担を減らすために GSI 自身が申し出ることもあるし、大学やその他から受け取っている奨学金の額次第では自動的に2つにされることもある。働き始めて分かったことだが、2つのセクションでも4つを受け持つ負担の半分にはならない。なぜなら、GSI も講義に出席する義務があるし、火曜日の講義の前に行なわれる教授を交えた約30分間のミーティングにも出なければならない。ちなみに月々の給与は4つのセクションを受け持つとおおよそ\$1,300。私は2つなのでその半分の支給されている。

私が受け持っている2つのセクションは月曜日の5時から6時と木曜日の2時から3時である。科目登録とセクションの登録は入学が決まった直後の5月頃から始まるが、講義の直後のセクションはすぐ満員になってしまう。そして、このセクションの学生は優秀だとされている。私が受け持っている木曜の2時～3時のセクションがこれにあたるが、月曜夕方方のセクションに較べると確かに学生はよくできる。

できれば受け持ちたくないのが金曜日の午後のセクションだ。週末の直前なので学生の出席率は悪いし勉強しない学生が多いと言われている。実際、ここを受け持っている友人は、評判どおりで

ひどくストレスがたまるとこぼしていた。どの GSI も質の高いセクションを受け持ちたいのが人情だ。そこで、学期の始まる前に籤引きをしてセクションを選ぶ順番を決めることになっている。

25人の学生が、私が受け持っている2つのセクションに登録している。その内訳は、中国系9、韓国系2、エルサルバドルと日本の混血1、白人5(そのうちユダヤ系2、オランダ系1)、ヒスパニック7、フィリピン系1。白人が少ないのは私が日本人だということと何らかの関係があるかもしれない。ちなみに、今年のパークレーの新入生全体で白人の36.2%に対してアジア系は38.2%もいて、全米の大学でもアジア系が非常に多い方となっている。

ディスカッション・セクションをどう組み立てるかはそれぞれの GSI の裁量に任されている。学生は、この日の講義までにこの本のこの章とこの章を読んでおくように決められている。もっとも、これを実行している学生は全体の1割にも満たないだろう。そこで、私のセクションでは、毎週2人の学生に課題の本の章を要約をさせ、その章についての自分の意見を言ってもらいにしている。そのうえで、今度は私の方から該当の章について学生たちに質問したり、私自身の意見を述べる。あるいは、章のテーマと関係することについて話したりする。その際、自分のフィールドを例にとって話をすると学生たちがより興味と持つ場合が多い。

成績は、A=4.0、B=3.0、C=2.0、C以下は不合格となる。GPA (Gread Point Average) と呼ばれる成績の平均は、就職や進学さらには奨学金の採否にずっとついて回るので、なんとかしてこれを上げようとやっきになる学生が少なくない。彼らはなるべくいいディスカッション・セクションに登録したいと思っている。そこで、まずいくつかのセクションに出てみて、いちばんいいと思ったセクションに登録し直したりすることになる。私は最初のセクションで、ある学生にいささか突っ込んだ質問をされた。私が述べた説明に彼は納得したようだった。後になって分かったことだが、この学生は普段はあまり発言しないがかなりできる方で、あるいはこちらの力量を試したのかもし

れない。

さて、成績は、家系図を作成する課題、中間試験(30%)、5、6枚のレポート(20%)、期末試験(50%)で決定される。家系図は提出しない場合のみ減点され、レポートも遅れると減点される。試験時間は中間試験が1時間半、期末は3時間。GSIは自分のセクションの学生の答案を採点する。

中間試験は全部で3問で、最初の問題は、10個の人類学のタームから(たとえば、authority/power, unilinear evolution など)から5個を選んで説明するもので、配点は40点で「30分で終らせるように」とされている。第2問は、2つの問題から1つを選んで解答する。30%で20分で解答することが推奨されている。その1つをみてみよう。「これまでに読んだ3つのエスノグラフィーのフィールド・ワークについて論じよ。個人的な要因と歴史的な要因が、人類学者の調査の方法、質問、そして結論をどのように規定するか。また、それらが依拠する人類学者とインフォーマントとの関係についても論じよ。人類学的な知が生成される方法を述べ、そのうえで人類学は科学かという問いに答えよ。」ほとんどが高校を出たばかりの大学生に、この問題に解答させるのは酷なような気もするが、読者諸氏はどう考えられるだろうか。

最後の1問はやはり2問から1つを選んで答える。配点と時間は同じ。その1つは「社会の支配という観点から、社会・政治構造と資源の関係を記述したうえで分析せよ。これまでに読んだ少なくとも3つのエスノグフィーから例をあげる」というもの。これは、具体的に論じることができる分第2問よりも簡単だろう。いずれにせよ、6冊のエスノグラフィーを読み込んでいないと答えられない。学部レベルで、アメリカの学生は日本の学生に較べてはるかによく勉強すると言われているが、たしかにそう思う。

レポートの課題は、次のようなものだった。「ハロウィーン・パーティーないしは死者の日(Dia de los muertos)を参与観察し、社会全体をまきこむ現象としての儀礼としてそれを捉え分析しなさい。」

私が採点したレポートのなかで最も出来が良かったのは、韓国系アメリカ人で、発達心理学を専

攻して博士号をとり教職に就きたいという学生のものであった。韓国系アメリカ人コミュニティのハロウィーンを論じたもので、学部1年生のものとしては抜群によく書けていた。私は次のようなコメントを記した。「たいへん優秀。アドバイスとしては、1. パーティーの具体的な描写を入れるともっといいだろう。2. 4ページの「夢の実現」について。他の儀礼の例を示して比較すると、論議の厚みが増す。いずれにせよ、たいへん良くできている。」グレーバン教授は、各GSIの採点のばらつきを見るために、採点した最高点と最低点のレポートを提出するように指示した。上のレポートに90点でAをつけてグレーバン教授に提出した。教授はこう書いてきた。「90点でAという評価は結構。少しコメントを付け加えておいた。君ももう少し書くように。」そこで、細かい箇所にもコメントを加えることになった。小論文を添削するようなつもりにならないといけないようだ。

さて、教える側が学生を評価するのと同様に、学生も教える側を評価する。GSIは最後のセクションで、評定票(evaluation sheet)と呼ばれる紙を学生に配る。この紙には「期末試験が終って、最終的にグレードが決まるまでGSIはこの評定票を見ない」と書かれている。さらに無記名なので、学生は安心して教える側に評価を下すことができる。評定票の様式は学部によって異なるようだが、人類学部ものには全部で12質問が書かれている。10項目については、1から5までの数字が書かれており、学生はその数字に丸をつける。たとえば、「セクションはうまく構成されていきましたか」という質問には、5が「常に」で1が「決して」となっている。ほかに「どうすれば、セクションはもっと良くなりますか」という質問には、学生が自分の意見を書くようになっている。そして、最後にセクションとGSIについての全般的なコメントを書く覧がある。このシステムで学生側から評価を受けるのはGSIだけでない。教授も講義やゼミに対する評価を下されることになっている。

教員が学生と恋愛することは珍しくない。しかし、教員が自分の講義なりゼミをとっている学生と恋愛すると問題になる。成績をつける際に公正さを欠くことになるというのだ。一昨年も東部の

有名校で、スキャンダルがあった。ある男性の教授が自分の講義を受講している女子学生とつきあうようになったが破局した。女子学生は、教授は成績を上げるからつきあうようにと誘ったと告訴した。その教授は、以前別の大学でもそうした問題を起こしたことが露見し、窮地にたたされた。その後どうなったかは知らないが、おそらく解雇されたのではないか。冒頭のアドバイザーの注意は、初めて学生に教える GSI にとっては、重要なポイントなのである。実際、このセミナーとは別

に、GSI という教授と学部生との間の不安定な身分について、学生がゼミを開催した。そしてここでは、学部生との距離をどう保つかについてが論議された。

日本と較べて、アメリカでは教える側と教えられる側の関係がずいぶんとセンシティブだ。GSI として働くことで、このことを身につまされた。いい経験ではあるが、少々疲れるなあという偽らざる感情を記して筆を擱くことにしたい。